

はじめに

「文章の指紋」という言葉を見た時に、「はて？」と思われた方も多いのではないだろうか。ここにいう「文章の指紋」とは、「文章の書き手を特定できるような、書き手の文章の特徴」を意味しており、それ自体、著者の造語である。著者はこれまで、さながら指紋から人物が特定できるように、統計的な観点から文章の特徴を把握することによって、文献の書き手に関する疑惑の解明が可能となるのではないかと、模索してきた。

書き手が明確でない文献やその真贋が問われている文献は、洋の東西を問わず数多く存在する。この点、偉大な宗教家、優れた思想家、著名な作家の著作として、古くから世界中の多くの人々に親しまれ愛読され続けてきた作品として例外ではない。

もちろん、これらの著作の疑問を解明すべく、記載内容の検討、歴史的事実の考証、さらには、紙質、インク、墨汁といった化学的な分析による年代推定など、実に様々な方法が試みられてきたであろう。しかし、それでもなお解明に至っていない古い時代の文献や、筆跡鑑定の出来ない、近年のワープロなどで作成された文献の書き手の推定はどのようにして行えばよいのか。本書はこのような疑惑が残るいくつかの文献に対して、

著者のいう「文章の指紋」を求めるために試みられた諸外国の研究を紹介することに加え、著者自身がこれまでに多少とも関わって来た日本語文を対象とする研究について、その概要をまとめたものである。

これまで数理科学から最も縁遠い領域と思われてきた文化系の諸学問においても、今や数量データに基づいた客観的根拠が求められる時代となった。

感性という土壌の上に開花した文化・芸術の評価や研究において、これまで重きをなしてきたのはやはり感性であった。しかしながら、在来の研究にあつては感性を生み出す心の働きというものがまだ解明できておらず、感性の大きさを測る方法もまた、いまだ定かにはされていない。人工知能（AI）の研究が驚異的なスピードで進められつつある高度情報化社会といわれる今日においても、いまだに「感性」とは、およそとらえどころのないものである。

そのような感性に基づく、主観的な文化関連に係る研究の中においても、文献の原著者、成立年代、成立順序や著者の思想上の変化などに関する疑惑を解明するうえで、データとその統計分析により客観的根拠を求めるという試みが進められている。これまでは、ただ何となく「原作者が異なるのではないか」と感性的に捉えていたものを、数

量的な観点から一層明確にしようというのである。いわゆる「コンピュータの進歩に伴う情報のデジタル化」という大きな流れに乗り、文化を育成してきた感性という土壌にも、数理科学の思考法が次第に浸透しつつある。人文学をめぐっても時代の趨勢は確実に変わりつつある。

さて、本書で紹介する「文献に対する統計分析」において、研究史上の嚆矢となったのは、一八八七年に発表されたメンデンホール (F. C. Mendenhall) の研究である。彼はこの論文において、文献に出現する単語の長さの分布は、書き手が同じならば同じような形状になり、書き手が異なる場合は異なる形状になる、という実例を示した。それまでは、単に主観的、感覚的な議論の多かった著者推定の問題に関して、「単語の長さの分布に見る形状の違い」というすぐれて客観的で、誰もが理解できる「文章の指紋」となる可能性のあるものが示されたのである。この研究に刺激され、その後、文献の記述内容や文献中の単語の意味についての解釈といった、それまで常用されて来た専門的な観点とは全く異なる、統計的な観点から著者の推定や文献にかかわる諸問題を図るといふ研究が、人文学の種々の領域の文献に対しても大いに試みられるようになった。本書では、まず「グリコ・森永事件」において多数の挑戦状・脅迫状を書いた「かい人21面相」が実は1人ではなく、2人いた——とする、いわば「21面相」への逆挑戦状

ともいべき統計分析の話から始め、これまで著者が関わってきた日本語文献の統計分析に関連する研究と、諸外国での著名な文献に関する統計分析の研究を紹介させていただく。

本書を通じ、読者の方に文章を統計的な観点から分析することで、書き手の「指紋」を探る面白さを知っていただき、その必要性や重要性をも併せて知っていただければ、著者にとってこれに過ぎる幸いはない。

目次

はじめに……………(1)

第1章 かい人21面相は二人いた——脅迫状を書いたのは誰か [犯罪事件篇] …… 1

1 二人いた「かい人21面相」——21面相への逆挑戦…………… 2

2 殺人犯の蛇足——保険金殺人事件…………… 19

3 銀行強盗となった新聞王の令嬢——パトリシア・ハースト事件…………… 29

4 サイバー犯罪への挑戦…………… 36

【コラム1 これは何語? 44】

第2章 ノーベル文学賞の盗作疑惑——小説の作者は誰か【文学作品篇】……………47

- 1 『ハムレット』を書いた人物——シェイクスピア・ミステリー……………48
【コラム2 中世の架空の詩人トマス・ロウリーの捏造 60】
- 2 ノーベル賞作家の盗作疑惑——シヨロホフの『静かなドン』……………62
- 3 大河小説はどこから引き継がれたか？——『紅樓夢』の二人の作者……………69
- 4 『源氏物語』の作者は一人か——「宇治十帖」の文体への疑問……………74
【コラム3 本居宣長にも筆の誤り——『源氏物語』「手枕」の巻 87】
- 5 男性作とされる物語に見られる女性的な要素……………90
——『うつほ物語』最後の二巻
- 6 弟子による補筆の可能性——『西鶴遺稿集』と北条団水……………95

第3章	愛国者の名を騙る者——国王を誹謗したのは誰か「政治・哲学篇」……………	103
1	真贋論争が続くギリシア哲学の重要文献——プラトンの『第七書簡』……………	104
	【コラム4 古文書に出現した後世の言葉 111】	
2	愛国者の名を騙る者——『ジュニアス・レターズ』……………	113
3	書いたのは米国第四代大統領?——『ザ・フェデラリスト』……………	120
	【コラム5 贋作収集が趣味(?)の著名な数学者 132】	
第4章	神の言葉を伝える——聖書を書いたのは誰か「宗教篇」……………	135
1	預言者イザヤ複数説——「イザヤ書」(『旧約聖書』)の著者……………	136
2	使徒パウロが書いたのは何通?——「パウロの書簡」の書き手……………	143
3	「第二の福音書」と呼ばれる書物を書いた人物……………	149
	——『キリストにならいて』の作者推定	

4	真贋論争が続いてきた遺文——日蓮の『三大秘法稟承事』……………	154
	【コラム6 『源氏物語』の写本における表記の揺れ 165】	
第5章 「文章の指紋」は作り直せるのか……………		
1	「文章の指紋」を見つける……………	168
2	「文章の指紋」となった「読点のつけ方」……………	172
	【コラム7 文章分析の豊満な土壌・電子図書館「青空文庫」 178】	
3	心の変化と文体の変化……………	179
4	なぜ文章の統計分析が重要か……………	185
	おわりに……………	193
	参考文献……………	197